
帝王学園生徒会

鐘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

帝王学園生徒会

【NZコード】

N10220

【作者名】

鐘

【あらすじ】

魔法や魔術が普通の世界、5大学園の一つ、私立帝王中学校、ここで繰り広げられる、事件や戦い、主人公の神童蒼真は生徒会として色々な事件に介入していくのだった・・・戦闘力と学力がすべての世界の運命は？作者の気まぐれと勢いの駄作学園ファンタジー、よろしくお願いします。

キャラクター設定（前書き）

作者「始まりました～よろしくお願いします m - - m

蒼真「駄文ですが・・・よろしくお願いします m - - m

作者「盛り上がつてこいつよ！」

蒼真「気分と勢い・・・」

作者「今回は主人公の設定です 世界設定などは次回になります」

蒼真「不定期更新ですが・・・よろしくお願いします。」

キャラクター設定

「キャラクター設定」

「主人公」

神童蒼真 13歳 男 B型 173cm 52kg

瞳の色 紅色 髪の色 金髪 イメージ色 黒
似てているアニメキャラ 上条当麻（とある魔術の禁書目録）

一年三十組 私立帝王中学生徒会所属 役職 副会長

学力 一年5000人中 第1位

戦闘力 一年5000人中 第1位

異名「天下無双」 十星王の異名「冥王刹那」

普段は、のんびり性格だが仕事になると冷静に戦況を把握し
確実に仕事を成功させる、生徒会には優秀枠で入り
主な仕事が戦闘系なので満足している

天下を統べる十人、天下十星王の第2位でもある
家族は蒼真以外死亡、ペットの鳥と暮らしている
基本は刀と手甲で戦う、魔法も得意、アニメ大好き中学生

キャラクター設定（後書き）

作者「凄く短いですが・・・今回は終わりです」

蒼真「短！」

作者「技や好きな物なんかは本編で・・・」

蒼真「この調子で大丈夫かねえ？」

作者「大丈夫さ！勢いあれば！」

蒼真「まあ期待してる人なんか居ないと思つがな

作者「気分と気まぐれだから・・・」

蒼真「まあ頑張ってくれ」

作者「おう！」

次回 第零話 世界と始まりの音

第零話 世界と始まつの音（前書き）

作者「始まりました w プロローグ的な？」

蒼真「お前が疑問系でどうすんだよ…」

作者「とにかく w 世界設定などな感じです」

蒼真「ダメな作者だ…まつたく」

第零話 世界と始まりの音

魔法や魔術が当たり前のように存在する世界

天下十星王が統べる弱肉強食の世、学生も大人も実力がすべて
5大学園が一つ、私立帝王中学・・・そこから始まる物語

「・・・まだ眠いな・・・」

ピカピカの中学生になつてから一ヶ月・・・さすが5大中学とだけあつて忙しい

なんか優秀枠で生徒会に入つてしまつて・・・まあ楽しいけど
え？本当に優秀なの？って？・・・まあ一応はな

「さて・・・屋上で寝るとしますかな」

ここアスカイド第一地区から帝王中は遠くない・・・まあ5分で
着くかな

学校と言つより学園並みの広さの中学校・・・迷子になつてしまつぜ

「今日は確か風紀委員の演説？なんかあつたような気がする」

風紀委員・・・新撰組と名乗つてゐる生徒の安全、風紀を乱す者
を正すために頑張つてゐる

風紀委員さんの活動のおかげで、俺の仕事も少し楽になつてゐる
のだがな・・・

「さて・・・今日も働くかな」

蒼真の主な生徒会の仕事は侵入者駆除や学校の見回りである
特別推薦組 三十組は絶対に授業を受けなければいけないと書つ
事は無いので

・・・そばつていろのだ

（帝王中屋上）

「やつぱいじで毎寝は定番だよな・・・マジで」

ああ～睡魔様の降臨だ・・・おやすみです・・・

「生徒会副会長サボりなんて・・・恥ずかしい

・・・何も聞こえない・・・邪魔者の声なんて

「風紀委員の演説ある・・・生徒会の参加する」

「・・・お前も入ったのか？新撰組とやら」

「・・・うん、無音も入った・・・」

「そつか・・・」

蒼真とは世から仲で、けつこう仲が良い・・・うじい

「そんな演説に参加する仕事は会長から聞いてねえぞ」

「それでも普通は参加する・・・」

普通なのか？・・・世の中そういうもんなのか？

「めんどくせえから・・・却下だ」

「蒼真に・・・来て欲しいな」

・・・断れない空気・・・しゃうないな

「はあ～・・・行くか

「・・・行こ」

「うして・・・睡魔様をスルーし、仕事が増えるのであつた・・・

第零話 世界と始まつの音（後書き）

作者「ヒロイーン？登場！」

蒼真「だからさあ～なんで疑問系？」

無音「私が・・・蒼真と・・・（／＼／＼）」

蒼真「あ～本氣にしてるよ～」

無音「蒼真は・・・嫌なの？」

蒼真「（なんて答えればいいんだ！？）」

作者「まあそいつこいつ話は今度にして・・・それでは」

作者「駄文ですが・・・ありがとうございましたm・m」

無音「評価や感想・・・待つてる」

蒼真「次回 第一話 正義と信念」

第一話 正義と信念（前書き）

作者「とつても弱じよ・・・」

蒼真「だつたら寝ひよ」

作者「大丈夫さ、今回は風紀委員の演説？だね」

蒼真「だから、なんで疑問系？」

作者「では、どう？」

第一話 正義と信念

風紀委員の演説・・・毎年恒例となつてゐる新撰組の田標を語る時間みたいな感じである

とても優秀な生徒達・・・風紀委員の中の風紀委員とも言えるであらう

「おひ・・・・あれが副長さんの・・・土方先輩か」

土方 鬼那 きな 三年一十七組 新撰組副長

「我ら新撰組は正義の名の下に集い・悪を斬る者である・あー・同士よ、ここに集え!」

やう言ひと10人位が土方先輩の下へ行つた・・・やつぱし増え
るのか

無音も入るらしくからな・・・俺の仕事が減るよつに祈るかな

「蒼真・・・無音も行くね」

「ああ・・・まあ頑張れよ」

「・・・うひ」

接近戦型武器を重視としている新撰組、刀を主体とした人が多く組に分かれて行動し、その活躍は他校でも噂になつてゐるらしい

「ふざけてんじゃねえよ!」

出たよ・・・毎年恒例の新撰組反対派、そして毎年の如くボコボ

「こちれるらしき

つて・・・俺の仕事かよ

「何が正義だよ・・・ふざけやがって、そんなもの壊してやるよー。」

大きな斧を構え突進していく、この学校に入る奴は大体が戦闘か
勉強は出来る人達だ

大きな斧に魔力を纏わせ突進していく

「生徒が恒例行事の邪魔をするなよ・・・」

「お、お前は！？」

「生徒会副会長・・・神童蒼真、生徒の安全保護のため対象を気絶
させる」

仕事になるとちゃんと切り替え、冷静に状況を把握し確実に仕事を成功させる

一年で副会長になるまでの実力があるから、この仕事も任せられた

「正拳裂破！」

ドゴオーネン！

「ガハア！」

普通の正拳突きに見えるが、かなりの威力を誇り、鋼も粉碎する
と言われている

蒼真は生徒保護のため気絶や軽傷までなら戦闘を許している

「こ」の程度で風紀委員に挑むなんてな・・・馬鹿が

「演説に来てくれていたとはな・・・」

「久しぶりですねえ・・・土方副長さん
「ふつ・・・いつも通りでいいのだぞ？」

帝王中に入学して、風紀委員に勧誘された・・・その時以来だな、
話すのは

「まあ連れて来られましてね・・・」

「ふつ・・・そうか、助かつたぞ、感謝する」

礼儀正しく、先の反対派の事件のことに、お礼を言われる

「俺が居なくとも・・・大丈夫だつたでしょ？」

「ふつ・・・当然だ」

「んじや・・・俺は戻りますんで」

「うむ・・・今度手合させ願いたいものだがな」

こうして、毎年恒例の風紀委員の同士を集めるための演説は終わり
毎年の如く、けつこうな数入隊した

「朝から忙しいな・・・まつたくよ」

毎年恒例ではあるが・・・風紀委員の隊員の数が増えるのは良い
のだが

反対派の数も増えてきてるらしい・・・忙しいな

「演説に行つていたらしいな・・・
「仕事してきましたよ・・・帝会長」

黒覇帝 三年三十組 生徒会会長である
その1900以上あるであろう巨体ながらの素早さと賢さも兼
ね備える

天武の会長である

「聞いたか？・・・新撰組に珍しく男が入つたらしいぞ」
「へえ）・・・確かに珍しいですねえ」

あの土方さんが認めたと言つことは強い・・・つてことは仕事が
減る！ヤツタアー

「まあ俺には関係無いっすけどねえ」
「まあ何らかの事件があるやもしれん、一応注意だけしておいてく
れ」
「了解・・・」

・・・と言い終わると会長の姿は、もう無かつた
さすがに速いなーと感心しながらも頬寝をするのであつた

「新撰組に・・・男・・・か」

第一話 正義と信念（後書き）

作者「終わりましたね～」第一話

蒼真「新撰組って・・・男じゃないのか？」

作者「さあーそれは置いて、土方副長に男について話してもらいましょう」

土方「うむ・・・私はあまり認めてはいないが・・・局長が言ったのでな」

蒼真「土方先輩は認めてないんですか・・・」

土方「あの優しさは戦では死を呼ぶかもしだぬしな」

作者「おっと、このままじゃ完璧にキャラ設定分かつてしまつので、ここまで」

蒼真「次回の、お楽しみってことか・・・」

作者「そういうことだ、それでは！」

蒼真「駄文ですが・・・ありがとうございましたm・m」

土方「次回 第一話 一つ輝く刃」

第一話 一つ輝く刃（前書き）

作者「来ましたねえ・・・第一話

蒼真「なかなか速いかもな・・・」

無音「出番・・・無いの」

作者「ヒロイン枠があるぞー!？」

蒼真「だからセ・・・なんで疑問系?」

無音「蒼真と・・・はう（／＼／＼）」

蒼真「あ～完璧本気にしてるよ」

作者「今回は新撰組に入隊した男関係の話です」

蒼真「本編をじつわー!」

第一話 一つ輝く刃

いつも通り屋上で昼寝をする蒼真
仕事の無い時は寝るか図書室で本を読むか・・・」
そんな蒼真の近くに忍び寄る影が・・・一つ

「おーい・・・起きろ・・・授業サボリは禁止だぞ」「・・・誰だ?お前」

・・・三十組は、ある程度授業に参加しなくていいルールなんだが
生徒会の仕事で学校見回りつてことになつてゐるし・・・

「俺は新撰組五番隊組長の北道 ほんどう 和貴だ かずき」「

・・・新撰組・・・男か」

「マジかよ・・・いきなりのHンカウント・・・面白いけど、めん
どくさい展開だな

会長も注意しとけつて言つてたしな・・・

「近藤の推薦でな・・・ははつ」

「へえ〜・・・局長さんの推薦か・・・凄いんだな、お前」

「まあ幼馴染だしな、実力は普通だ」

「そうこいつとかよ・・・でもまあ、実力を見てみたいかも

「あーそうだ・・・授業をさぼりすきるなよ」

「三十組だからな、大丈夫さ」

「だからって・・・ほとんど出でないだろ?」

・・・バレてますねえ、はい

「生徒会の学校見回りの休憩中だ」

「お、お前！生徒会役員なのか！？」

知らなかつたのかよ・・・色々知つてゐたなと思つたが
肝心なこと知らないとはな・・・面白い奴だ

「生徒会副会長 神童蒼真だ」

「・・・副会長はサボりつてのはな・・・」

「気に入ら負けだ」

「気にしないと負けな気もするがな・・・」

返されただと！？相手にスルーをせる技を・・・出来るな・・・
こいつ

「新撰組ならやるべきことは・・・一つじゃないか？」

「・・・言葉で分からないなら・・・実力で・・・か」

新撰組はな・・・土方さんがルールを作つてるからな、戦闘が多いんだよな

まあそのおかげで仕事が減るのだがな

「あんた・・・強いのか？」

「自分の目で確かめてみたらどうだ？」

「なかなかの余裕つぱりだな」

蒼真はあれでも戦闘力一年1位の実力を誇つてゐる
十星王の一人でもある彼が負けることなど・・・ほとんど無いのである

「んじゃ・・・新撰組五番隊組長、北道和貴、参るー。」

と刀を抜き構えた・・・悪くは無い・・・さすが組長さんだ

「天霸・装甲!」

和貴の刀が輝き、光輝く魔力を纏っている

「凄いな・・・かつこいいもんだ」

「一応鍛錬は欠かさない奴なんでな・・・」

油断大敵・・・俺もやるか、仕事じやねえ〜がな

かるが・・・

「輝天地塔!」

地面から光輝く棒のよつた物が大量と出てきて、一いつ矢矢襲い掛

「旋風脚撃・・・」

横になぎ払うが如く振られた足の勢いで相殺された

蒼真は手足の鎧のよつた武器をつけ、基本はそれで戦うのがスタイルである

「さ、さすが副会長さんだけあるな・・・」

「空拳裂破!」

400m距離ならば相手の正拳破裂の少し弱い程の威力を当てる技
和貴は回避できず・・・直撃してしまう

「グハア！・・・すげえ威力だ・・・」

「その程度か？」

「まだまだ！」

今のを耐えるか・・・まあ伊達に局長さんの推薦を貰ってないってことか

まあ・・・そろそろ終わらせるがな

「うあああああー！」

薙ぎ主体の戦闘で攻めてくるが当たらない
剣道をやっているのか、足運びが剣道っぽい感じである

「正拳裂破！」

「なつ！？」

蒼真の正拳裂破は直撃せず・・・寸止めされていた

「負けたか・・・強いな、蒼真は」

「お前も、まあまだ・・・土方さんも出てきたらどうだ？」「なつ！？」

和貴は気づいてなかつた見たいだな・・・
つてことは土方さんの差し金かよ

「気づかれるとは思つていたが・・・本当に気づかれているとはな
「土方さんの差し金ですか？」
「つむ・・・新しい組長に、世の中を教えてやつたのだ」

俺じゃなくても・・・よくないっすかねえ

「ふ、副長、このことを知つてやつたのか？」

「五月蠅い！近藤さんの推薦だからと言つて、いい気になつてゐる
からだ！」

「いい気になつた覚えは・・・無いけどな」

・・・なるホロ・・・仲がよろしく無い様子で
新撰組での内乱は、やめてほしいな・・・

「うむ、協力感謝する・・・行くぞ！バ和貴^{カズキ}5番隊組長！
「バカじやねえ～よ！」

・・・仲が良いのか？悪いのか？・・・わからん

第一話 一つ輝く刃（後書き）

作者「終わりました」第一話

蒼真「あれは・・・仲が良いのか？」

無音「喧嘩するほど・・・仲が良い」

作者「うーん・・・どうなんだろ？」

蒼真「お前が疑問系でどうすんだよー」

無音「蒼真・・・毎回怒つてたら・・・疲れる」

蒼真「そうだな・・・」

作者「そういうひじいた

蒼真「・・・イライラしてきたぞ」

作者「すいません・・・それではー」

蒼真「駄文ですが・・・ありがとうございましたm - m

作者「次回 第三話 始動する妖しき者」

第三話 始動する妖しき者（前書き）

作者「始まりました～第三話」

無音「題名からして・・・事件の予感」

蒼真「忙しいのは嫌だな」

作者「主人公がそれでどうすんだよ～」

無音「蒼真は・・・このキャラがいい（／＼）」

蒼真「なんか一人で変な空気になつてゐるぞ」

作者「まあ頑張りましょ」

無音「本編・・・なの」

第二話 始動する妖しき者

「新撰組の時代は終わるのだ」

「そう！我ら妖刀軍の力によつて・・・」

新撰組反対派は動き出す・・・

お互い新たな同士を集め・・・戦力を増やし・・・戦いが始まる

「今日も昼寝の時間だな～おやすみなさい」

我らが生徒会副会長 神童蒼真は、いつも通り昼寝の時間へ突入する予定だったのだが・・・

ドゴオーーーン！

「俺の昼寝の時間を返せ！」

事件の音と共に睡魔様をスルーし

生徒会の仕事を成功させるため・・・現場へ向かうのであった

「新撰組の時代は終わりだあ！」

「終わるのは・・・お前達・・・天突き！」

「グハアアー！」

新撰組反対派が動き出し、校内での戦が始まった
新撰組の数を上回り、数で攻める新撰組反対派

「無音ちゃん！大丈夫？」
「美虎」「そ・・・ね」

新撰組組長隊も出動し、前線で戦っている
予想以上の大きな戦となつている

「無音ちゃん達回避してねえ！白銀の礫！」

空から氷柱の如く氷が相手に降り注ぐ

新撰組は接近戦型ばかりでは無く、魔法専用隊もいるのである

「くつ！新撰組如きが！我ら妖刀軍に勝てると思うな！」

「妖刀・・・？」

「妖刀？」アニメとかに出てくる奴？・・・などと無音は考えていた

「死ねえええ！」

「つ！？・・・しまつたなの」

不意に見せてしまつた隙をつかれ、敵の攻撃を直撃・・・

「やひせねえ～よ・・・無音に傷つけたらな・・・重症じやすまん
ぞ」

ガキイーーーン！

「戦闘で隙を見せたら、死亡フラグだぞ、無音」「ありがとつ・・・なの、蒼真」

「ギリギリセーフ・・・アニメの登場シーンみたいで、決まったなよな、俺
数は減つてるが・・・まだ多いな

「生徒会副会長、神童蒼真、新撰組に味方する!」

その一言で生徒達の士気の差は大きく逆転する
最強の呼び声高い副会長が味方になれば、勝利はほぼ確定、生徒
の士気は上がる

「妖刀か妖怪か知らんが・・・仕事だからな、退治じや!
「た、たかが一人だ!やつてしまええ!」
「雑魚が・・・天爆暴風!」

蒼真が地面を拳で突くと地面は割れ、地形も悪くなり
妖刀軍の足場は最悪の状態になつた

「今が好機!新撰組よ!力を見せつけてやるぞ」

土方副長の一言でほぼ全員が地形の変化に戸惑う妖刀軍に突撃
先の接戦が嘘のように戦いは新撰組の圧倒的勝利で終わつた・・・

「すまん・・・助かつたぞ、神童副会長よ
「いいですよ、仕事なんで」

「ありがと・・・蒼真」

怪我人も少なく、妖刀軍も重症者少なく、妖刀と言つぐらいの刀は出てなかつたがな

・・・まだ残党がいるパターンか

「んじや・・・頑張れってくれよ」

「ふむ、またな」

（1時間後 午後3時）

北道と、その幼馴染 緋風 唯は各部活へ行く道を歩いていた
「和貴は忙しそうだね、新撰組に入つて」
「まあ近藤からの誘いだしな、断るわけにはいかなかつたし」

同じ一年十一組の一人、幼馴染で付き合いが良く
和貴は唯から勉強を教えてもらつたりと良い仲だつた

「んじや、また明日ね」

「ああ・・・そつちも頑張れよ」

和貴は剣道部 唯は吹奏楽部へと向かつていった

「ふつふふ・・・新撰組五番隊組長か・・・妖刀「底」の餌にしてやる」

和貴は気づかない・・・妖刀の魔の手が忍び寄ることを・・・

第二話 始動する妖しき者（後書き）

作者「第二話でした」

蒼真「俺、主人公なのか？」

無音「蒼真以外に主人公はいない」

作者「その通りさー？」

蒼真「そこ疑問系はダメだろつー」

無音「作者さんは馬鹿な勢いで書いてるから・・・把握できない」

作者「その通りさー」

蒼真「そこは疑問系じゃないんだな」

作者「次回は妖刀との対決ですな」

無音「誰も・・・期待してない」

蒼真「その通りだな」

作者「そんな・・・それでは」

蒼真「駄文ですが・・・ありがとうございましたm・m」

作者「次回 第四話 閻夜に煌く一つの刃」

帝王学園風紀委員メンバー（前書き）

蒼真「第四話じゃないのか？」

作者「その前に新撰組メンバーの紹介を」

無音「無音も・・・ぐるの？」

作者「もちろんだー！」

蒼真「組長だけだろ？今回ま

作者「その通り」

無音「では・・・どうぞなの」

帝王学園風紀委員メンバー

私立帝王学園風紀委員メンバー

近藤威沙音 女

15歳 A型 身長 165cm 体重 秘密
三年二組 髪の色 桃色 瞳の色 薄い青

私立帝王中学 風紀委員 新撰組組長

愛刀名 天舞・虎

学力 三年5200人中 第3970位 戰闘力 三年5200
人中 第1230位

桃色の長い髪で明るい性格、少し天然

明るく元気な雰囲気にお人よしな性格で新撰組の皆から慕われている

戦闘力・学力が特に優れているわけでは無いが、生徒をまとめる力
士気を上げる力に優れており、戦の要となる人物である
和貴とは幼馴染である

土方鬼那 女

15歳 B型 身長 167cm 体重 秘密

三年二組 髪の色 紫色 瞳の色 赤色

私立帝王中学 風紀委員 新撰組副長

愛刀名 鬼斬り・滅

学力 三年5200人中 第1565位 戰闘力 三年5200
人中 第690位

黒髪のポニーテールで少し冷静だが戦闘だと燃えるタイプ
組長以上に普段の新撰組をまとめている人物

普段は落ち着いているのだが、争いごととなると燃えるタイプ
周りが見えなくなりこともある、戦闘力もなかなかで皆から頼
られている

蒼眞とは仲が良いのだが、和貴を嫌っている？

沖田美虎 女

14歳	A型	身長	153cm	体重	秘密
二年三十組	髪の色	黄色	瞳の色	薄い紅色	
私立帝王中学	風紀委員	新撰組	一番隊組長		
愛刀名	天刀・心躍る大地				
学力	二年5500人中	第3140位	立	戦闘力	

学力 一年5500人中 第3140位 戰闘力 一年5500人中 第97位

黄色い髪のショートで血分の高いことを僕と並んで

普段はのんびり昼寝しているか新撰組最強と呼び声高く
沖田率いる一番隊は重要任務についてことが多い、戦闘では普段か
ら見られる戦闘っぷりである

蒼真とは毎晩仲間で和貴とも仲が良い

斎藤無音

13歳 A型 身長 140cm 体重 覚えてない
一年三十組 髪の色 薄い黄色 瞳の色 緑色

私立帝王中学 風紀委員 新撰組三番隊組長
愛刀名 天罰狼刀

學力 一年5000人中 第685位 戰鬪力 一年5000人

中
第102位

薄い黄色髪のショートで団子のやつなシインをしてこらが帽子で見えない

蒼真以外の人とは、あまり話さず口数少なく、感情表現が上手く出来なく、何を考えているか不明

突破力と一撃の破壊力で三番隊組長になつた、気配を消すのが得意

意技

巨大な帽子をかぶつていて、実はその帽子は召喚獣だつたりする蒼真にのみ心を開き、蒼真が学園内で頼つている数少なき人物

帝王学園風紀委員メンバー（後書き）

作者「まあ今日は4人でした」

無音「・・・まだまだたくさんいる」

威沙音「初登場な気がするうー！やつはー」

美虎「次回は四話だねえ」

蒼真「和貴は紹介しないのか？」

作者「次回の新撰組紹介で紹介するよ」

鬼那「ふむ！我らの活躍！期待してくれ」

作者「まあ妖刀編終わつたら・・・生徒会だけども」

蒼真「そういうえば出てないな・・・」

作者「出さなければ・・・それでは...」

作者「駄文ですが・・・ありがとうございましたm・m」

美虎「次回こそが四話だよ」

第四話　闇夜に煌く一つの刃（前書き）

作者「妖刀軍が本格的に動くね」

蒼真「生徒会と風紀委員が動くな」

無音「忙しい……の」

蒼真「昼寝の時間がああああ」

作者「さあ、今回は蒼真と無音の共同だ」

無音「夫婦の共同……」

蒼真「おい、変な勘違いがいるぞ」

作者「まあ、いつてみよう」

第四話 閻夜に煌く一つの刃

新撰組と新撰組反対派の本格的な戦いが始まった
蒼真と無音は妖刀軍と戦闘中

「多いな・・・まあ適当にやるぞ」

「うん・・・共同作業」

俺達は一人・・・まあ一人のほうがやりやすいがな・・・
妖刀の持ち主とやらは不在の様子だな・・・

「無音！魂連鎖！」

「・・・うん」

魂連鎖

パートナーの契約をした者の一人が発動可能
どちらかが魂の玉の状態になり、もう一人の体へ、魔力や身体能
力を格段に上げ

魂化した人の意思もあるため、五感も優れる

「影暗鬼・天黒 壱ノ型 黒鎖」

影暗鬼・天黒

影と闇の魔力で作られた暗殺武器、殺傷能力が非常に高く
魂連鎖の状態だと、殺傷能力、纏う闇の魔力が上がる

「な、なんだ？あれ？」

「黒鎖は相手を追尾する半円月型の鎌の刃を持つ武器だ」

「（・・・全滅）」

敵の数は・・・多いが、影暗鬼の使ったからは・・・ゲームオーバーだな

軽傷で済ませれるかな？

「行くぞ！影追い！」

ズバシュツ！バシュツ！

追尾式で飛んでいく黒鎖を回避できず切り裂かれていく
普通の武器で受け止めるのも無理・・・結果・・・勝つ術も無い
つづーことだな

「闇風旋風！」

回転する黒鎖から闇の竜巻魔法を発動させる
広範囲魔法だからな・・・まあ大半は終わりだらうな

「つおおおおお！」

「ふつ・・・その程度の動きで！」

背後から襲い掛かる相手には裏拳、元々拳での戦闘も得意とする
蒼真は

体に魔力を纏わせるのが得意で五感はとても鋭い

「（大きい魔力反応・・・ある）」

「・・・あれか・・・召喚獣かよ」

前方に仁王立ちの如く立っている・・・巨大な熊？

「グワアアアアア！」

「勢いは合格だが・・・裂威！」

相手の体の内部に魔力ダメージを与える一撃の正拳突き
外部のダメージよりも・・・痛いんじやねえ～かな
裂威の一撃で隙が出た・・・

「月影飛翔！」

黒鎖を投げ一閃・・・真つ二つになつた・・・
敵の全滅確認・・・お仕事終了・・・いざ一晩寝の時間へ！

「（他の隊の助太刀・・・行かないと）
「めんどくせえ・・・却下だ」

「副長の力見せてやるついでぞ！」

鬼那の一言で新撰組の士気は上昇
反対派に数が劣っているものの実力差、幹部的存在が居るか居ないかで違う

「はあああああ！」

「つ、強ええええ！」

バシュツ！バシュツ！

鬼那の力と速さのある剣技で次々と反対派の奴らは戦闘不能になつていく

副長の名は伊達ではない

「下校の時間もあるからな・・・終わらせるぞー！」

鬼那の一言で新撰組が一気に攻撃姿勢に・・・そして

「鬼斬り・一文字！」

紅色の魔力を纏う刀で一閃
見た目以上の凄い威力である

「ふう・・・妖刀の持ち主は居ないな・・・」

「他の組は戦闘中か・・・五番隊は・・・どうやらへん?
・・・北道和貴・・・か?」

不意に後ろから・・・ 気配を感じなかつたぞ

「えーっと・・・迷子?」

んなわけねえよな・・・俺に用事? 部活か?

「新撰組は邪魔だ・・・妖刀の力を見せてやる
「つー?」

妖刀・・・だと!?

第四話　闇夜に煌く一つの刃（後書き）

作者「皆強いな・・・って感じの第四話でした」

蒼真「次回は一人目の妖刀使いか・・・」

無音「蒼真と・・・（／＼／＼）」

蒼真「何を想像してんのかー！さつぱり分からん！」

作者「大丈夫だよ、無音、デートの話はあるからー！？」

無音「よくやつたの・・・」

蒼真「いやいや！何勝手に決めてんのー！？」

作者「気にしたら負けだ！それでは」

蒼真「駄文ですが・・・ありがとうございました」

作者「次回　第五話　妖刀「底」」

第五話 妖刀「底」（前書き）

作者「一本目の妖刀来ました！」

蒼真「名前からして強くなれやつな『氣』が・・・」

無音「・・・実力底無し？」

作者「そうー底無し・・・って訳でもない」

蒼真「まあ和貴に期待しどとか」

作者「本編ビリヤー！」

第五話 妖刀「底」

「（妖刀の持ち手か・・・やるか！）」

「ふつ・・・怖氣づいたか？」

一気に攻めるか？様子を見るか？まあいつも通りだ！

「天霸・装甲！」

和貴の刀が光る魔力を纏い、和貴は突貫していく

「毒沼！」

相手が刀を地面に刺すと大きくは無いが、沼が現れた

「なつ？なんじゅ」りや？」

「底無しの毒沼だ・・・」

「凄いヤバイ名前だな」

これ喰らつたらゲームオーバーだな

・・・なら！

「光剣燕！」

和貴の頭上に光輝く刀が七本現れ相手に向かって飛んでいく
和貴の数少ない長距離技である

「・・・毒針林」

地面から紫色の針が出てきて防ぎやがった・・・
名前からして、また危ない技が出てきやがった・・・

「接近戦に持ち込むしかねえ」かな
「やれるか？貴様に？」

・・・舐められたもんだよなあ、五番隊組長の力見せてやるか

「天霸・装甲！」

「なつ！？」

今回の天霸・装甲は刀に魔力を纏わすのでは無く
自身の体に光の魔力を纏わせる！

「行くぞ！」

ヒュン・・・

「なつ！？」

ほんの1~2秒だった・・・30㍍ぐらいに距離を一瞬でつめた
のだ

普通の身体能力ならば無理だろう

「終わりだ！」

ズバッ！

反応が遅れた相手に一閃

深くは入らなかつたが・・・けつこうなダメージを与えたと和貴

は思つていたが

「ふつ・・・この程度で・・・」

「・・・化け物かよ・・・」
「いつは」

傷が塞がり、さつきより元気な感じがするぞ

・・・妖刀の力つてか?

「毒蛇之牙!」

相手の体からドロドロの紫色の蛇みたいなのが突進していく
体から・・・気持ち悪いな

「輝天地塔!」

ドゴオーーン!

蛇をすべて消滅させ・・・?
居ない・・・どこに消えた?

「・・・ijiだよ」

「なつ!?」

ズバツ!

背後からの突然の声に振り向いたら・・・斬られた
あの間を一瞬で?どうやって移動しやがった?

「沼から出てきたのさ・・・お前の負けだ」

「くつ・・・・本氣で化け物かよ」

沼から出てきたつて・・・河童かよ?

・・・ん? 河童は川だつたつけ? ・・・どうでもいいわ!

「・・・周囲に人の気配無し・・・やるか?」

「はつ・・・・今更何をするつてんだ?」

・・・周囲に人が居ると巻き込むからな・・・今なら使えそうだな
俺の刀の解放をな・・・

「無限輝光・・・解放!」

和貴が、その言葉を言った瞬間

和貴の持つ刀が光輝き多くの光となつて天へ向かつた直後
流星の如く光の刀が降り注ぐ

「無限一光流・・・いざ!」

「なんだ? この数の刀は?」

「光燕!」

近くにある刀を一本持ち、近くに刺さつている5本の刀を相手目
掛けて飛ばす

すべての刀が武器である力が無限一光流である

「グハア!」

「流星落とし!」

和貴が飛ばす刀の攻撃に反応しきれず喰らつてしまい隙が出来たところに

和貴が3本の近くに刺さる刀を上空に飛ばし・・・それが相手に

落下

「くつ！・・・毒蛇之牙！」

「双刀ノ盾」

和貴が自分の目の前に打ち上げた刀が回転し魔方陣を描いて盾になつた

毒蛇之牙は防がれたが・・・また消えたのだ

「死ねえええ！」

「同じ技が通用すると思つなよ！光の舞！」

和貴が左手で持つっていた刀で防ぎ、その刀を手放し近くにある刀を持ち

舞うように相手に刺していく、無限のようにある光の刀が次々と刺さつていく

「ガ・・・ハアツ！」

20本ほど刺さつたところで倒れたか・・・

パチンッ！

和貴が指を鳴らすと光の刀がすべて消えて一本の刀に戻つた

「はあ・・・はあ・・・疲れたな」

だ
こうして一人目の妖刀使いとの戦いは新撰組の勝ちで終わったの

第五話 妖刀「底」（後書き）

作者「一人目撃破りだね」

無音「出番無かつた・・・の」

蒼真「和貴けつこう強いな・・・」

作者「さすが新撰組の男だねえ・・・」

無音「・・・無音、模擬戦で勝つた」

蒼真「・・・さすが無音だな」

作者「和貴君・・・一気にイメージダウンだねえ・・・それではー」

作者「駄文ですが・・・ありがとうございましたm-m」

蒼真「次回 第六話 とある昼の食堂戦争」

第六話 とある廻の食堂戦争（前書き）

作者「妖刀の持ち主倒したね」

無音「和貴・・・よくやつたの」

蒼真「色々調べさせてもらつたしな」

無音「あんま分からなかつた・・・けどね」

作者「後何人いるのやら・・・」

蒼真「先が長いな・・・」

作者「ガンバ！本編をどうぞ」

第六話 とある晝の食堂戦争

妖刀の一人目を倒し色々調べて分かった事がある
・・・後9人程居るらしい

「先が長いな・・・」
「・・・頑張るの」

「今の状況を言つと?・・・

一人して屋上で晝寝でござりますけども・・・

「今日の晝は幻のパンが来るぞ」
「まだ死にたくないの」

そう・・・半年に一回、幻のパンと呼ばれるパンが限定1000個発売する

値段は2000円、かなりの生徒が争う時間だ

「逝つてらつしゃい・・・」
「字が違うような気がするが・・・」
「気になら・・・負けなの」

よし！逝つてくるか！あつ！違つ・・・
行つてくるか！いざ！出撃だ

ピーンポーンパーンポーン

「ただいまより～幻のパン・・・を発売します！時間は10分間・・・

・スタート！」

その放送と同時に

「ゴゴゴゴゴ・・・

「せ、世界が揺れている？」

「こ、これが噂の食堂戦争？凄まじいな・・・
だが・・・俺は負けん！生徒会副会長の力見せてやる！」

「くつ・・・なんて数だ？」

食堂はかなりの数の生徒で埋め尽くされている

・・・アメフト部とか相撲部とかのガードが硬いな・・・

「蒼真副会長！突貫します！ウオオオオ！」

くっ！これしきの数で・・・俺を止められると思つなよ。・・・人がゴミのようだ・・・・・

「金を渡して・・・ゲット！」

や、やつた・・・勝つたぞ戦争に
・・・・美味しいのか？

「おいーそこのパンを持っている奴！」

・・・・俺か？

「なんですか？・・・一年生が用ですか？
「そのパンを賭けて勝負だ！」

・・・まだ戦争は終わっていないのか・・・

「行くぞ！」

「正拳裂破！」

バゴン！

「・・・クソ」

よし、今度こそ・・・！？

生徒が向かってくる？パン狙いか？

「空拳裂破！」

バゴォーーーン！

・・・人が「//」のようだ・・・脱出!

「やつたぞ無音・・・戦争に勝つたんだ」

・・・脱出に成功し、屋上に帰還成功
美味しいのか? 2000円も使つたんだ、美味しいはず・・・

「・・・ジー」

「・・・どうした無音」

無音が可愛い田代一郎を見ている

どうしますか?

- 1、パンをあげる
- 2、パンをあげる
- 3、パンをあげる

・・・待て!待て!

どれを選んでもパンが無くなるぞ

「パン・・・美味しいぞな」
「くつーさすがの無音でもあげる」とせ・・・

「パン・・・美味しそうな」
「くつーさすがの無音でもあげる」とせ・・・

けつこう頑張った

いつもなら毎寝出来る時間を使ってパンを買いに行つたんだ

「・・・ジー」

「・・・無音食べたいなら買こに行けばよかつただろ?」

「怪我したくない・・・」

・・・じつすじゅーいいんだ?

「蒼真・・・食べたいの」

くつ・・・可愛い田に負けるわけこほいかん!
半年に一回のイベントを・・・

「食べたいの・・・」

蒼真の田の前まで来て座る
そして見つめられ・・・

「グハア!」

勝者 斎藤無音 勝因 上田遣い

「モフモフ・・・おいしいの」
「俺の金と努力・・・」

一瞬にして金と努力の結晶が無となつたの
まあ無音が幸せそうだし・・・いいかな

その「ひる」風紀委員・新撰組室

「ありがと～和貴君～！」

「い」くろ「うじやバ和貴よ」

「和貴君ありがと～～」

新撰組の雑用となつっていたのだ・・・

「金が・・・」

第六話 とある町の食堂戦争（後書き）

作者「戦争だつたねえ」

蒼真「金と努力が～～～」

無音「～～～ありがと、おいしかったの」

作者「蒼真は、いい男だ！」

蒼真「まあ～～～いいかな」

無音「優しいの～～～さすが」

作者「つむ、それでは～！」

蒼真「駄文ですが～～～ありがとつむこました」

作者「次回 第七話 武神への階段」

第七話 武神への階段（前書き）

作者「もうすぐテスト……」

蒼真「まあ頑張れ

作者「更新遅れましたm-m」

無音「誰も……期待していないの」

蒼真「その通りだな」

作者「うう……本編をじつだ」

第七話 武神への階段

妖刀軍・・・なんとか一人は倒せたが、妖刀を持ってる中で一番弱い奴らしい
けつこう全力だった・・・まだ足りない・・・実力が・・・
頼つてみるかな・・・

「なあ～」副会長さんよ
「なんだ? バ和貴?」
「副長と同じ呼び方するなつ！」

副長が変な呼び名をつけたから・・・皆から変な呼び名で・・・
強いて言つて思い浮かぶ人は、この人だからな・・・

「何の用だ? 僕は昼寝で忙しいんだ」
「俺を鍛え「断る!」まだ全部言つてねえ～よ！」

即答却下・・・悲しいな、諦めるな! 和貴!
新撰組五番隊組長の力を見せるんだ!

「そこを頼む!」
「・・・めんどくさい」
「生徒会は生徒の悩みを解決してくれるんだろ! ?」
「本人の気分しだい・・・」

・・・これが帝王学園生徒会副会長かよ・・・
こんな発言しちゃつていいの? 生徒の味方だろ?」

「鍛えてください、生徒会副会長様」

必殺！土下座！

「あ・・・そこまでやんのかよ」

「ここまでやるんだ」

「だが断る！」

「何故だあああ！」

「」の展開とセリフ的に完璧だつただろ！

そこまでやつて断るなんて・・・さすが副会長だ・・・「」が違うな

「冗談だ・・・」

「まったく冗談に聞こえなかつたのだが・・・」

やつたぞ！・・・鍛えてくれるのか・・・

強くなつて見せる・・・が、素晴らしい特訓が待つていそゞで怖いな・・・

・・・第一の特訓・・・いきなり模擬戦・・・
本気でこないと鍛えないだそつだ・・・本気かよ
まあ・・・やるしか無いか！

「無限一光流・・・無限輝光・解放！」

数多くの光の刃が雨のように降り注ぐ・・・和貴の武器である

「いくぞ！光の舞！」

「・・・紅蓮落刃！」

一瞬で和貴の頭上に移動し赤い色の魔力を纏つた足でのかかと落とし・・・

ドゴオ――――ン！

「くつ！光燕！」

「空拳裂破！」

くつ！全部弾かれたのかよ・・・なんて攻撃範囲だ

「乱激風斬！――」

「うわあつ！」

蹴りから放たれる斬撃？くそ！防ぐのに精一杯だぞ・・・隙も見当たらない・・・動きもギリギリ見えるぐらいだ・・・

「出直して来い・・・獅子王殺！」

「ガハア！・・・・・・」

隙をつかれて凄まじい一撃を受け・・・和貴戦鬪不能・・・

「明日から特訓だ・・・遅刻は許さん・・・」

「うして・・・特訓が決まったのであつた・・・

第七話 武神への階段（後書き）

作者「第七話でした」

蒼真「・・・俺主人公？」

作者「ただけど・・・」

蒼真「そう見えない感じがするんだが・・・」

無音「氣のせい・・・のような氣がするの」

蒼真「そななのか？・・・」

作者「そだとも・・・それでは！」

作者「駄文ですが・・・ありがとうございましたm・m」

作者「次回 第八話 鬼と光と最強と」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1022o/>

帝王学園生徒会

2010年10月16日15時58分発行